

## 軍閥と近現代内モンゴル

### 開催趣旨

軍閥とは、前近代的な巨大中央集権国家の崩壊に伴って形成される地方勢力の台頭現象の一つである。これらの地方勢力は軍事力を頼りに、帝国期に敷かれていた従来の地域秩序を基盤に形成され、それに挑戦する形で勢力範囲を拡大していくのである。また、これらの軍閥勢力が統治の基盤とする地域の多くは多民族の接触地帯であり、帝国期の伝統的な秩序の崩壊に乗じて自立を模索する弱小民族の居住地へ食い込むというのが特徴的である。清帝国の崩壊に伴って形成された中国北部各地の軍閥勢力はまさにこの事例にあたる。

中国の北部辺境地帯を東西に横たわる内モンゴル地域は、中国における地域分類でいう「東北」、「華北」と「西北」の三つの地域に跨っており、東アジアを南北に分断してきた歴史的な境界線である万里の長城—柳条辺牆もちょうど内モンゴル地域の南部に沿った形で伸びている。清朝時代に、この長城—柳条辺牆より北西の地域は「外藩モンゴル」と呼ばれ、モンゴル遊牧民による特殊な世界として位置づけられた。しかし、清朝はモンゴルを効率よく統治するために、この沿線地帯で「都統」、「將軍」といった複数の軍事的統治システムを敷き、外藩モンゴルにおいて清朝自らが確立していた「盟旗制度」と重なる二重の統治形態が形成されたのである。清朝の崩壊に伴って、このモンゴル統治の軍事システムは漢人の地方勢力によってそれぞれ支配され、それがまた軍閥形成につながって近隣の内モンゴル地域を支配していくのである。清代の黒龍江將軍、吉林將軍や盛京將軍を基盤に形成された奉天軍閥、熱河都統に由来する熱河軍閥、そして綏遠將軍の基盤を継承する傅作義勢力や閻錫山が率いる山西軍閥などは清朝時代の軍事的体制を基盤に、内モンゴル南部地域を取り囲む形で形成された軍閥勢力である。これら複数の軍閥勢力は、内モンゴル各地をそれぞれの勢力下に分割統治し、中華民国中央政府の弱体化を背景に、暴力によって内モンゴル地域を統治してきた。日本の進出によって内モンゴルの一部地域で軍閥統治は解体されたものの、軍閥統治の影響は中華人民共和国の建国までつづくことになる。従って、近現代内モンゴルにおける軍閥統治を考察することは、自治と独立に挫折した内モンゴルの近現代史の複雑な背景を探るという重要な意義を有する以外に、清朝の崩壊から現代中国の国家体制が確立される半世紀における北方辺境の地域秩序を整理する重要なポイントでもある。

日時：2015年2月15日（日曜日）

場所：滋賀県立大学 A0棟 3F 評議会室

## 開会

13:10～13:20 趣旨説明 ボルジギン ブレンサイン（滋賀県立大学准教授）

## 基調講演

13:20～14:00 柳澤 明（早稲田大学教授）  
清朝の東北—満洲統治と奉天軍閥の形成

## 第Ⅰ部

司会：木下光弘

14:00～14:30 周 太平（内モンゴル大学教授 内モンゴル大学近現代史研究所所長）  
チチハル（齊齊哈爾）と内モンゴル統治

14:30～15:00 ボルジギン ブレンサイン（滋賀県立大学准教授）  
清朝の北方統治体制と環内モンゴル軍閥の形成

15:00～15:20 ～休憩～

## 第Ⅱ部

司会：周太平

15:20～15:50 ナランゲレル（内モンゴル大学教授）  
1920—1940年代における内モンゴル騎兵と中国軍閥—日本

15:50～16:20 木下 光弘（滋賀県立大学大学院博士後期課程）  
傅作義とウランフ（烏蘭夫）について

16:20～16:50 ウリジトンガラク（滋賀県立大学大学院博士後期課程）  
湯玉麟と熱河蒙旗

16:50～17:10 ～休憩～

17:10～18:00 総合討論

18:00 閉会

## 主催：

◎科研・基盤研究[C]「現代中国の民族識別期における旗人の動向に関する研究」  
（滋賀県立大学） 課題番号：23520870

◎科研・基盤研究[A]「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の歴史生態人類学的研究」  
（名古屋大学） 課題番号；26257003

## 問い合わせ（掲示依頼責任者）：

木下光弘（滋賀県立大学大学院博士後期課程） muxia71@hotmail.com